

重点政策 第1弾 経済再生の実現



「鴨川みらい宣言」 鴨川のみらいを共に創るために



市民の皆さまから、多くの声をお聞きしました。
 その中で、観光、農業、漁業、あらゆる分野の皆さまから共通していただいたご意見は、「鴨川には素晴らしい魅力があるのに、十分に活かしきれていない。もったいない」という言葉でした。

鴨川の持つ豊かな自然、文化、そして人々の力。
 これらがもっと輝き、市内外に伝わるようにすることが、これからの鴨川には必要です。

そのためには、それぞれの分野で光る“点”となっている魅力を、“線”でつなぎ、“面”として広げていくことが大切だと考えます。

国の制度を活用し、鴨川の資源を最大限に引き出すためには、現場で活躍する市民の皆さまと、国の制度をつかさどる職員が同じ場で意見を交わし、知恵を出し合うことが欠かせません。

私はその場をつくり、皆さまと共に鴨川の未来を描いていきます。
 鴨川の可能性を、次の世代へ。
 一緒に、鴨川のみらいを創っていきましょう。

亀田郁夫

*本号では、これまで「響」でお伝えしてきた「政策」について、実践されている方々の声を基に考えてみました。次号以降も政策と実践を基本に、鴨川のみらいにとって何が必要かを具体的に考えてまいります。皆様のご意見も是非お寄せください。

Youtubeチャンネルではインタビューの様子などの動画を配信する予定です。
 また、ホームページでも日々の活動や政策に関する情報を発信しています。



ホームページ

房総を強くする会
 〒296-0041 千葉県鴨川市東町665
TEL : 04-7099-0190
FAX : 04-7099-0191
<https://kamogawa-mirai.com>
 Mail : kameda1903@gmail.com

実績×実現力



鴨川みらい宣言



鴨川みらい宣言



鴨川みらい宣言
大きな選択の年
を迎えて

謹んで新年のお慶びを申し上げます。本年は乙巳(きのとみ)の年にあたります。「乙」は未だ発展途上の状態を表し、「巳」は植物が最大限まで成長した状態を意味するとされています。
みらいへの発展の可能性を秘めた鴨川市が、大きく成長する年になることを願っています。
さて、本年は鴨川市の今後の流れを決定づける大きな選択の年でもあります。
「経済再生の実現」
「守る命・生活・つなぐ未来」
「市民のために変わる市役所」
この三つの重点政策を公約の柱として、「地方創生の波に乗り遅れないよう、鴨川市の根幹ともいえる第一次産業を守り、発展させ



講師とのやり取り
講義開始前の短い時間でしたが「鴨川みらい宣言」に掲げる「国と市民が直結した課題解決システム」がなければ、農業振興の実現は難しく、時間が限られていることをお伝えしました。
これに対し浦杉氏からは「情報共有を進め、鴨川市を農業再生の

ることを中心に考え、強固な行政基盤を構築する」ことを宣言させていただきます。ありがとうございました。
本号では、重点施策の一つとして掲げた「経済再生の実現」について、多くの方々との話し合いをもとに、具体的に論じます。
鴨川市の農業振興について
現在、日本全体で人口が減少する中、農業分野では高齢化が進み、衰退が続いています。このような状況の中で、鴨川市の農業振興をテーマにした「鴨川市中山間地域等活性化協議会」主催の勉強会に出席してまいりました。
講師は「農林水産省関東農政局 地方参事官 浦杉敬助氏」でした。浦杉氏は農林水産省からアフリカ・タンザニアに6年間派遣され、水路の建設や地元住民との協力を通じて農業を振興させた実績を持つ実務派で、鴨川市の農業振興にも強い関心を寄せてくださいました。
講義開始前の短い時間でしたが「鴨川みらい宣言」に掲げる「国と市民が直結した課題解決システム」がなければ、農業振興の実現は難しく、時間が限られていることをお伝えしました。
これに対し浦杉氏からは「情報共有を進め、鴨川市を農業再生の

国のモデルとすべき」という力強い言葉をいただきました。
実現すれば、中山間地域の活性化だけでなく、平地の農業やその周囲の環境との相乗効果により、鴨川市の基盤が強化され、さらなる魅力向上につながります。
これにより、移住希望者の増加やインバウンド効果も期待でき、さまざまな目的で人々が訪れるまちづくりが進むと考えます。
講習会の内容
ここで、講習会「鴨川の中山間地を守るためにすべき事」の内容を簡単に紹介します。
● 鴨川市には中山間地域で活動している集落が24か所あり、それぞれの地域が個性を生かしながら活発に活動しています。
そして、中山間地域を守るためには、各集落がノウハウを共有し、全体で協力することが重要であるとの認識の下、講習会には約100名が参加し、多くの積極的な質問が寄せられ、集落活動への熱意と力強さを感じる場面が多くありました。
● 24の集落が協力して目標を設定し、地域の体制を強化することが重要であると説明されました。特に、事務作業の負担を軽減するために、新たな交付金を活用し「労働者協同組合」などの設立が提案されました。
強くしなやかな農業を築くため

には、現場と国が直接連携し、一体となって法律の解釈を共有することが不可欠です。
その中で、市の行政は調整役として積極的に取り組み、実行する役割を果たす必要があります。
鴨川市が国のモデル地域となることを目指し、この取り組みを進めることの重要性を改めて強く感じました。
● その他、ドローンを利用した圃場の管理、無人草刈り等、IT・機械の利用による効率化があげられております
地方政治と現場の課題解決
地方政治に関わる中で、国の法律が現場に適用される際、細かな法規制が障壁となり、本来の目的が果たせない状況が多く見受けられます。まさに「木を見て森を見ず」のような事態です。
鴨川市が持つ資源である農業、漁業、観光、商業、医療、福祉、教育、スポーツなど、それぞれの分野で問題点を把握・分析し、県や国に訴えかけることが必要です。
また、共通の認識を持ち、法律が適切に施行される体制を作ることが重要です。
特に、国力の基盤である第一次産業については、これ以上待たない状況であり、国と地方が一体となって取り組むことが不可欠です。

1 経済再生の実現

人口減少社会に挑戦

- 多世代移住で活性化
- 働く人不足の解消
- 空き家、空き施設の活用

農業・漁業の振興に挑戦

現場に沿った法律の認識共有

- 農業・漁業の生産性を上げるための基盤整備と収益性確保
- 農地の有効活用
- 新たな特産品開発「ジビエ活用含む」
- 経年劣化による漁港の整備・機能の強化と魅力の拠点化
- 海業の理解と追及による漁業における収益確保
- 六次産業化の推進
- 地産地消の仕組み強化
- 鴨川ブランドの全国展開、世界展開

新しい時代の商業・観光に挑戦

- ふるさと納税による商品開発と営業により財源確保
- 鴨川プロモーションの強化
- 魅力の映像発信とフィルムコミッション
- 海辺エリアの再構築
- 観光の広域連携強化
- 中山間地域が持つ魅力を再発掘・活用

地域資源の再発見と利活用に挑戦

- 地域資源を再発掘と徹底活用
- 再生可能エネルギーへの対応
- 森林資源の活用
- 海辺に広がる松林のシンボリック活用

インフラ整備に挑戦

- 地域高規格道路の推進
- 遅れている南房総の道路網整備、拡充
- ネット環境への対応
- リモートワークや起業の促進

2 守る命・生活、つなぐ未来

医療・健康・介護・福祉を守る

- 健康長寿日本一の鴨川
- 予防医療とプライマリケアの推進
- 地域包括ケアシステムの進化
- 生涯現役のまちづくり
- 孤立や孤独ゼロの仕組みづくり

教育・子育て環境を守る

- 子ども目線の学校再編
- 子育てと仕事が両立できる支援体制構築
- 結婚、出産、子育てのトータル支援
- 多様な子どもたちの居場所充実

歴史・スポーツ・文化・芸術を守る

- 歴史的資源の保全と魅力発信
- 市民の活動による地域文化の承継
- すべての世代のスポーツ環境整備

防犯・防災で安心と安全を守る

- 地域全体で命を守る防災の仕組み構築
- 地域全体で取り組む防犯体制強化

生活環境を守る

- 持続可能なごみ処理の推進
- し尿処理施設など生活環境施設の整備

3 市民のために変わる市役所

市役所の意識改革の徹底

- 職員の意識改革と組織文化の見直し

国と市民直結の課題解決システム構築

- 鴨川の地域課題を鴨川市民と国・県が直結して問題解決につなげるシステム構築

財政危機からの脱却

- 行政プロセスの無駄撲滅
- 徹底した現状把握と分析の実施
- 市議会議員との情報共有・一体型市政運営



対談
経済再生
の実現

まずは鴨川で結果を！
獣害対策と
ジビエの魅力追求
の両立を目指して

菊込太郎さん
LA SELVAGGINA
KAMOGAWA
合同会社代表



対談
経済再生
の実現

農業の新しい形
皆の智恵を結集し
生産性の高い農業へ挑戦

内記朗さん
鴨川市中山間地域等
活性化協議会会長

Q 内記さんはずっと農業をやつてこられていますが、今の鴨川の農業の課題についてどう考えていますか。

A 農業全体で言えば農業従事者が減っているということですね。それから後継者や高齢化の問題で

すね。なぜそうなっているのかと考えると、簡単に言えば採算性が低いということ。跡継ぎになつてほしいと思つても口に出せないですね。

中山間地域ではやはり小規模の農家が多くて、でもだからといって農業をあきらめてしまったら中山間地域の荒廃が進んでしまう。耕作放棄地がますます増えてしまふ。鴨川市内で大規模に展開できる地域はあまりないんですが、それで良いのかつてことになるかと、決してそうではない。

だからこそ活性化する必要があるということですね。私は、市政としてのリーダーシップがどのような形になろうと、この課題に向かつて取り組みたいと思つています。

Q 同感です。私も政策そのものを皆と一緒に話し合うことが重要だと思つています。どのような立場であれ地域のために何か必要かを考え続けたいと思つています。

Q ジビエの処理加工施設を作つたきっかけは何だったんですか。

A 農業被害や生活被害があるからと、ただ殺されて捨てられているイノシシやシカ、キョンを見て何かに生かせないかと思つたのと、食べてみたらすごく美味しかったので、味を広めたいと思つたのがきっかけです。

Q 捕獲後の処理は。

A 初めに山で血抜きをし、施設の外で洗います。そして施設内で内臓を出し、皮剥ぎをします。その後、冷蔵庫で熟成させてから生肉として真空パックにして冷凍という手順です。とにかく衛生管理には注意しています。

Q 鴨川ではどのくらいのイノシシやシカ等が獲れているんですか。

A 鴨川市では今年度、現在約3500頭くらい獲れていると聞いています。今のところ、工場に搬入しているのは私が2割で、あとは解体所周辺の猟師さんからです。ただ、まだまだ活用できていない部分があるので、獣の被害はまだまだ減らないという部分がありますので、それを両立して、まずは鴨川で結果を出したいと思つています。

さて、先日も研修会があつて、参加したんですが、活発な意見が出ていましたね。

A 鴨川には今24の集落があるなかで連合会という形で活性化協議会があります。それと労働者協同組合（集落の年度を活用）をもつ少しグレードアップして生産性を上げようという取り組みを進めているのですが、研修会の講師にお話を聞いたら、そのような取り組みは全国初のことでした。

話題になつている集落のネットワーク化、スマート農業という、自立型のトラクターやドローンなどでの作業、一番大変な草刈りをラジコンなどでやるつていうのを共同でやつたり、集落ごとにやると国などから支援も厚くなるという話です。

Q そのような取り組みによって近代化され、従事者不足にもつながらつていくことでしょうか。

A そうですね。今まで一人でやつていた作業が機械化されたり、時間短縮につながつたりすることになりますので、生産性が上がりますので良いと思つています。

Q 先日の研修会にも国から参事官がお見えでした。このような制度を活用するためにも、国と皆さ

ばと思つています。

Q ジビエの魅力、誰に知つてほしいですか。

A 都心部の方からの引き合いもいくつかもらつていますが、まずは地元の人に食べていただきたいですね。

Q 商品としての展開には、部位毎の値段や、どうやって作っているか、どれくらい熟成させているのかなどが記載されたカタログがあつたら営業しやすいのでは。

A はい、是非、作ります。

亀田いくお
別荘を強くする会
ジビエの魅力PRで
鴨川の農業振興を

ジビエの魅力を広くPRすることで有害鳥獣の減少につながり、結果的に農作物の被害を減らし、農業をより魅力的な産業にすることができまふ。

さらに、ジビエが鴨川の新たな魅力として広く知られるようになれば、観光や飲食業の活性化にも貢献します。

この取り組みはまだ始まつたばかりですが、大きな可能性を秘めた、未来が楽しみなプロジェクトだと認識しました。

んが直結して課題に立ち向かう仕組みが必要ですね。

A 農業はなくてはならない産業ですし、その中に若い人たちを取り込んでいきたいというところがあります。

それは鴨川だけの課題ではないと思つています。若い人たちがここに定住して、子どもを育てて行けるような状況、定年退職後なども力のある人たちに活躍してもらつような地域にしたいと思つています。

そして、移動手段のない買い物難民みたいな弱者つていうんですから、そんな方々の支援にもつながらることになると思つています。

亀田いくお
別荘を強くする会
日本の農業
今ままで良いのか

内記さんのお話しの中で、何度も「このままで良いのか」という言葉が出てきました。

現状の農業という大切な産業を何とかしたいという強い決意を感じました。そして、これは鴨川だけでなく日本全国に共通する課題でもあります。地域のこつした熱い想いを、国の課題解決の仕組みにつなげることで内記さんを始め、中山間地域の活性化協議会で活動されている方々の想いを形にしていきたいと強く思つています。

対談
経済再生
の実現

農業が起点

理想の働く場、住まう場
つながる場を体現

井上隆太郎さん
農地所有適格法人
株式会社 苗目代表

Q 鴨川にいらしたきつかけや目的などをお尋ねしたいと思います。

A 2014年から鴨川に通い始めました。以前からゆくゆくは農業をやりたいと考えていて、移住先を探していました。ところが、農業をやりたいと思ってもすぐにできない。農地を手に入れる方法

も、農業の始め方もわからない。

そこで、いろんな場所で農業をやりたいんだけど、畑ありませんか？みたいなことを聞いて回りました。

いくつかの場所からお話があったのですが、鴨川が一番しっくりきました。都心から近く、豊かな自然がある。理想の場所でした。

まだ寒い2月に高速を降りた後の河津桜の景色を見て、素晴らしいところだなと思いました。

Q 実際に鴨川に移住されていかがですか。

A 鴨川の皆さんは皆すごくいい人ばかりです。ここを拠点に始めた事業も地域の皆さんのおかげで順調に続いています。

ここで働きたいという若い人も多く、この秋の募集では、20代から40代の若い方々が20人近く応募してくれました。

農業がやりたいとか、一緒に仕事がしたい、移住したいと言って



対談
経済再生
の実現

フィルムコミッション

映像の分野で
鴨川を世界にPR

久保尚之さん
元テレビプロデューサー
前鴨川市政策参与

Q 久保さんは東京でテレビマンとして活躍されていましたが、鴨川に移住したきっかけは何ですか。

A 大学卒業後、テレビ業界に入り、主にドキュメンタリー系の番組づくりに携わってきました。おかげさまで世界の色々なところに取材に行く機会がありました。

気づいたのは、日本と違って、

世界では、アフリカや東南アジアなど、人口が増えているということ。そこから、食料問題に目が向くようになりました。食べるくらいは自分で作りたいと思って、野菜を作るための情報を集めていたのですが、ちょうど鴨川で帰農者セミナーがあるのを知り、それに参加したのがきっかけです。

その後、鴨川市長からお声かけいただき、政策アドバイザーを経て、2024年4月から11月まで政策参与として活動しました。

Q 政策参与として、どんなお仕事をされていたのでしょうか。

A 政策参与として市長から「PRを頑張ってほしい」と言われ、市役所広報の動画でのPRや、テレビの情報番組に出演して鴨川市をPRしてきました。

鴨川には、大山千枚田や里山の風景、サーフィンに最適な海、みかん狩りやいちご狩りなどもでき



くれる人がたくさんいます。

ただ、今の私たちの力では全員を雇うことはできない、せいぜい一人か二人くらいなんです。

しかし、そんな若い人たちを一人でも多く受け入れられるような体制を作りたいと思っています。

Q それを実現するために必要なことは何でしょうか。

現状でも支援のメニューはあるのですが、手続きがとても複雑だったり、働き始める人にフィットした住まいがなかったり、移動の手段だったり、課題はたくさんあります。特に住まいに関しては、賃貸の集合住宅があると移住しやすいですね。そんな支援が充実してくると、ここで働き、暮らす人が増えてきて、地域のつながりも充実してくると思います。

新しく建てるではなく空いている物件の有効活用など。（住居は事務所、お店としても）

また、農地や物件を取得するのも難しいのですが、農地・物件をいかに活用するかが重要だと思います。

雇用を生み出すためには、そこで何をするかをしっかりと考えて収益を生み出すことが必要です。シェアファームもその一つです。人がつながるためのコミュニケーション

る観光に最高のロケーションがいっぱいあります。私から見ると、

もっともっとメディアに取り上げてほしいと思っています。

参与としての仕事の中でも、一番やりたかったのはフィルムコミッションを作ることでした。

Q フィルムコミッションとはどういったものなのでしょうか。

一言で言えば、映画やテレビドラマ、CMなどの撮影が円滑に行われるよう支援する非営利の機関です。自治体やその関連団体が中心になって組織されている例が多いですね。以前から、地域活性化策としては注目されていますね。

勝浦市や南房総市にはあるんですが、鴨川市にはありません。

鴨川市には、市役所、観光協会、プラットフォームといった大きな窓口が3つありますが、現状ではどこが窓口なのか明確でなく、たらい回しのようになることがあります。そのため、メディア側がどこに相談すれば良いのか分からず、結果的に撮影を断念してしまいうケースも発生しています。

まずは、窓口を一本化することが必要だと思います。そうすることで、メディア側がどこに問い合わせをしたらよいかわかりやすくなりますね。

ーションの場も重要な要素だと思います。

Q レストランでは食材も地産にこだわっていると伺いました。

食材はほぼ地元産です。また、ここにあるハーブは100%鴨川産です。かなりの種類のハーブがありますので、オリジナルのハーブティーを作ることができます。地域の食に関する素材を有効に活用することにもこだわっています。



真の移住政策のカタチ

働きたいという若い人を引き付けている井上さんの哲学から学ぶことが多々ありました。

働きたいと思えるビジネスがあり、暮らしたいと思える環境があり、いろんな人と交流したい、繋がりたいという想いこそが、移住定住施策の根本にあることを実感しました。

そのために地域全体としてどのような政策が必要なのか、一緒に考え、行動することが必要です。

Q 実現へのハードルは何だと思いますか。

A 実現に向けた予算獲得にあたって、よく「効果を数字で表せないか？」と言われますが、数字にするのは難しい取り組みですが、間違いなく効果を出している自治体はあります。インバウンドで知名度を上げた地域もあります。

実際にロケが来れば、弁当などの食事、宿泊、車両、駐車場などにお金を落としてくれるだけでなく、無料でPRにも繋がります。ロケ地巡りなど観光客の増加、そして移住者の増加にもつながるようになります。

フィルムコミッションの可能性

鴨川の知名度を高め、経済再生につなげるためのプロモーション政策として、フィルムコミッションを活用することの意義は高いと思います。

映画やドラマの撮影誘致で、鴨川の美しい景観や観光地が全国に知られ、訪れる観光客の増加と共に、住民の誇りや一体感も高まります。鴨川シーワールドや自然豊かなロケーションを生かし、持続可能な観光資源として地域振興を図る好機となります。

亀田いくお
房総を強くする会

対談
経済再生
の実現

鴨川の変化を見つめて
もう一度見直してほしい。

佐藤八重子さん



Q 佐藤さんは長らく鴨川の文化活動を支えてくださっています。その元気の秘訣は何でしょうか。

A 私は、日々、目にすることを日記のように短歌に綴ってまいりました。特別に何かをやってきたということはありません。

そのようなことが積み重なって皆様のお力もいただき、「風と共に」という歌集も世に出させていたのだと思います。

Q 佐藤さんは伊藤左千夫、斎藤茂吉、島木赤彦らとともに日本近代短歌史に名を刻んだ、郷土の歌人である古泉千樫先生の姪に当たられますが、長狭にある「みんなみの里」も古泉先生の短歌のご縁と伺っておりますが。

A はい、千樫の歌に「みんなみの 嶺岡山のやくる火の こよひもあかく 見えにけるかも」というものがございます。

千樫が詠んだ鴨川の自然と、みんなみの里が象徴する里山の風景は、鴨川の自然美と文化を伝えるというところでつながっているのではないのでしょうか。

Q 佐藤さんの目には、今の鴨川はどう映っていますか。

A たいそうなことは申し上げられませんが、鴨川には本当に良い

対談
経済再生
の実現

新しい観光の魅力を創る
四季折々の魅力
世界に向けた
プロモーション

久根崎達郎さん
魚眠庵 マルキ本館
代表取締役 館主

Q 久根崎さんは鴨川の観光をリードされてきました。また、現在二つの宿泊施設を経営しているのでしょうか。これまでの経緯などお聞きできれば。

A 30代で宿を引き継ぎ、何とか一人前になることを目指していました。その後、アクアラインの開

通がきっかけで、経営はある程度安定しましたが、マルキ本館からは海が見えなかったこともあり、「海の見える旅館を持ちたい」という新たな夢も芽生えました。

そして数年前、学校跡地を活用する機会をいただき、新たに「璃庵」をオープンすることができました。

Q アクアラインの開通によってお客様に変化がありましたか。

A 自家用車で訪れるお客様は確実に増加していると感じています。

一方で、大型バスを利用した団体旅行は減少傾向にあります。こうした背景もあり、「璃庵」はプライベート感を重視したコンセプトで運営しています。

全体的な傾向として、団体旅行から少人数のグループ旅行へ、さらに家族などのプライベート旅行へとシフトしていると思います。以前は、一つか二つ優れた特徴があれば、ある程度の集客が可能



だったように思います。しかし現在では、口コミの影響も大きく、優れた要素に加えてすべての面で一定のクオリティを維持することが求められています。

私たちは魚屋から始まった経緯もあり、「魚料理」で他とは違う魅力を打ち出しています。

Q 久根崎さんは観光協会の会長としても活躍ですが、鴨川市全体の観光の変化などはどう見られていますか。

A 鴨川市の観光まちづくりは、まさに私たちの役割です。観光地には温泉が必要だという思いから、鴨川温泉旅館業協同組合を立ち上げ、鴨川温泉の普及にも力を注ぎました。



入湯税の収益についても、鴨川観光のさらなる発展や、新たな観光資源・魅力の創出につながる仕組みにしなければならぬと考えていました。

現在は鴨川シーワールドなどの存在が観光客を引き寄せていますが、鴨川の観光をさらに発展させるためには、四季折々の魅力を感じられる通年型の観光資源が必要だと考えています。一つでも二つ

ところ、素晴らしいところがたくさんございます。誕生寺や清澄寺などもそうですが、それをうまく活用できていないのではないかと日々感じております。ぜひ、以前の活気を取り戻してほしいと願っております。

日々目にする情景こそ
鴨川が大切にすべき宝

亀田いくお
別荘を強くする会

対談の中で「日々、目にすることを短歌に綴っている」とお話しされました佐藤さんの短歌の中でも私が最も好きな歌は、「ほとばしる 夏柑のしる口中には じけて青き 鴨川海」です。自然や郷愁、人の心の繊細な動きを捉える佐藤さんの目に、今の鴨川はどのように映っているのか伺いました。しばらく考えた後、返ってきたお言葉は、「良いところがたくさんあるのに、うまく活用できていないですね。」

鴨川が持つ資源や魅力が十分に生かされていない現状への想い、そして今の鴨川に対する佐藤さんの特別な想いが、その言葉に込められていると感じました。

地域の大切な宝を改めて見直すこと、そしてそれをしっかり発信していくこと——それが、鴨川再生の基本であると強く思います。

でも、そのような新たな魅力を創り出したいと願っています。

Q インバウンドについてはいかがでしょうか。

A インバウンドに関しては、鴨川はまだ弱いと感じています。海外からの旅行者にとって「行ってみたい」と思わせるような強いイメージが不足しているのではないのでしょうか。

少し夢のような話になりますが、鴨川全体を海やシーワールドをテーマに統一し、訪れる人の心に残るような取り組みを進めるのも面白いかもしれません。

時代の変化に対応した
観光地としての魅力

亀田いくお
別荘を強くする会

団体旅行から少人数のグループ旅行へ、さらに家族などのプライベート旅行へとシフトしていく中で、変化に対応した観光地の魅力づくりは重要な視点です。そして、その魅力を継続的に創造できる仕組みが、それを支える基盤になるという考え方に強く刺激を受けました。

これは観光だけでなく、まちづくり全体にも通じる普遍的な概念であり、財源も含めた仕組みの構築が重要です。